

玉川上水・分水網の存在価値

～世界遺産を目指して～

○玉川上水の開削 1963年(370年前)

羽村から四ッ谷大木戸まで43km、幅約5.5mの自然流下の素堀（開渠）の上水路（高低差92m、100mで21cm）、羽村から浅間橋（30km）長大な素堀の開渠部分が残存する。

○玉川上水の維持管理の変遷

①江戸時代＝持ち場村制度のもとで法面や堤の草刈り、樹木の手入れ、導水路は幕府の厳しい維持管理のもとにあった。

②明治以降昭和30年代まで＝水辺と一体となった草地や樹林からなる緑地は、玉川上水らしい風情を呈して、人々の散策や憩いの場として親しまれた。

③それ以降＝水の流れが止まり空ぼり状態のころから管理不十分で雑木が生い茂り、法面が崩落しているが、昭和50年以降、下水処理水ではあるが流れが復活し、今でも水と緑の景観を持つ市民の散策や憩いの場として親しまれている。特に、小平監視所～浅間橋→素堀の水路の面影が良く残る。

○玉川上水・分水網の存在価値

(1) 優れた歴史的土木遺産

①近世の優れた水利技術による江戸市中への導水路（上水道）の土木施設・遺構が残されている。

・平成11（1999）年 都条例による歴史環境保全地区指定

・平成15（2003）年 国の文化財（東京の発展を支えた歴史的価値を有する土木施設・遺構）に指定

(2) 近世水道施設としての役割

①近代水道の基礎となった玉川上水、現在も上流部は水道原水導水路として機能し、中流部小平以降も高度処理水が流され水路機能が維持されている。

②江戸時代の首都江戸市民の命の水を供給（飲料水、防火用水、園池用水、江戸城堀用水）、多目的な機能を有する都市給水施設→その後の江戸・首都東京の大発展の原動力→今もその機能を続けている。

(3) 武蔵野台地開拓の役割

①分水により新田開発を促し、多用途に活用された用水等の施設・遺構が残存する。武蔵野台地の分水嶺を流す玉川上水からの分水網（母なる川）→茅原の不毛の武蔵野台地の開拓（武蔵野新田開発）を可能にし→江戸近郊農村を作り出す（生活用水、農業用水として活用。玉川上水の水は、江戸に半分、分水に半分＝多摩地区に34分水開削）

(4) 生物多様性の生態系の保存

①30km（羽村～浅間橋）の雑木林と水は動物・植物の生活空間として生態系が保存されている緑の回廊（コリドー）となっている。

(5) 水と緑の景観としてのグリーンベルト

①羽村～浅間橋 75 ヘクタール（都立小金井公園 77 ヘクタール） 水と緑の景観を持つ自然公園、市民の健康づくり、散策コースとして親しまれる。

○玉川上水がもたらした水循環都市江戸の記憶を受け継ぐ東京

江戸の町人地、現在の日本橋・京橋・銀座周辺は、かつては水路網が発達した、まさに「水都」と呼ぶにふさわしい都市構造を有していた。幕末に江戸を訪れた異国人は、そうした町人地の情景を水の都ベネチアに比して称賛したほどである。

こうした水都が成立した背景には、近世城下町と水との深いかかわりがある。近世城下町では、まず城を囲むように、防御のための濠が二重三重に巡らされた。さらに、当時の物流の主軸が水運であったことから、町人地には水運路としての水路網が張り巡らされた。そうした水路網は、排水路としての役割も担っていた。当時の街路は、言うまでもなく土舗装である。そのため、特に雨水排水は、街路設計にあたっての最重要課題の一つであった。そこで、降水をうまく水路網に排水できるよう、微地形を丹念に読み込み、微高地や尾根筋に主要街路を配置して町人地全体の流水勾配を確保したり、あるいは微低地に排水路を新たに開削したりするなど、さまざまな工夫が重ねられた。そうした都市設計の結果、「水都」が誕生した。

東京は、これまでに幾度か大規模な都市改造を経験してきた。明治維新後の都市の近代化を目指した市区改正、関東大震災後の帝都復興、第二次大戦後の戦災復興、そして 1964 年の東京オリンピック開催に向けた都市改造。こうした過程で、水路の埋め立てや街路の新設・拡幅、さらに首都高速道路の建設などが進んだが、いまだ江戸の都市構造を継承し、日本橋の架かる日本橋川をはじめとして水都の記憶もよくとどめている。

2020 年の東京オリンピック開催を契機として、さらなる都市改造が進められているが、これからは、幕末に異国人から称賛されたような世界に誇れる水と緑に溢れる水循環都市を再構築するその手掛かりは、江戸から継承してきた水都の記憶にあると主張したい。

○世界遺産になりうる「玉川上水・分水網」の存在価値

玉川上水・分水網は武蔵野台地（南は多摩川、北は荒川に至る 700 平方 KM）の分水嶺を東西に貫き、かつての江戸・東京の発展を支えてきた水の大動脈だった。そして、武蔵野台地には 34 の分水をうがち、武蔵野の新田開発に役立ち、中小の河川やお濠に注ぎ、世界に誇る水文化都市江戸・東京の形成に大きく寄与してきた「広大な水利システム」だった。120 万人を抱える江戸時代の江戸は、イタリアのベネチアをしのぐ世界に誇れる「水の都」だった。

しかし、この「広大な水利システム」は、1960 年代に新宿の淀橋浄水場が移転され（1965 年（昭和 40 年）、玉川上水の小平監視所から下流には水が流れなくなったことや、小河川が下水路に変更され東京から小川は消えたこと、川の上に首都高速道路が造られるなどの東京の高度な都市の発展に伴い、大きく変貌してきた。

今後、持続可能な社会形成のモデルとして東京都が公表した「未来の東京」戦略ビジョンで言う「東京の水と緑溢れるまちづくり」が都民や行政の理解を得て、玉

川上水・分水網や外濠、日本橋川等の価値が再認識され、多摩川からの清らかな水が流れ、美しい水辺環境がかつてのような姿に可能な限り再生された暁には、「玉川上水・分水網の広大な水利システム」は、水都東京の再生につながると同時に、世界遺産となりうる価値がある。

○玉川上水中流域・小平の母なる川（水路）玉川上水・分水網

1653年に玉川上水が開削され最初に掘られた分水が「野火止用水」である。(1655年)。1656年には小川九郎兵衛が、伝馬継場設置と街道の整備を条件に小川村開設の出願をする。1657年1月に小川村分水、砂川村分水、国分寺村分水の開削が幕府から認められ、小平にも初めて人が住めるようになった。まさに、玉川上水・分水網は小平の母なる川（水路）であった。

その後享保年間（1772年～）に、幕府の財政再建を目的に新田開発が始まり小平でも小川村分水の他8分水が許可され、小川新田、鈴木新田、野中新田善左衛門組、野中新田与右衛門組、大沼田新田、廻り田新田と次々と新田開発が行われ、現在の市域の原型が形成された。小平市域の分水網は現在も約50KMが水路として残されている。これらの分水には、小川家および行政・市民等の尽力により、多摩川本流の水が流れている。今後、新堀用水・各分水が開渠で保全され多摩川本流の水が流れる状態にすることが喫緊の課題である。

○玉川上水・分水網を生かした持続可能な都市形成と世界遺産を目指して

2018年から2023年までの5年間で、東京都は外堀浄化を契機として「水の都」東京を蘇らせる3か年のアクションプランの予算化と具体化、長期的には、玉川上水の水を元の多摩川から引き、本来の玉川上水の姿に蘇らせる可能性を展望するなど大きく前進している。都が進める市ヶ谷、飯田橋濠など外濠の水質浄化の進展を注視しているところである。

2022年4月～11月には、玉川上水ネット10周年記念事業として「玉川上水・分水網関連遺構100選上下流連携地区別展示と講演」の連続展示と講演を実施した。4月の第1回羽村・福生地区展から6月の第2回武蔵野・三鷹地区展、9月の第3回小平・野火止用水地区展、10月の立川地区展、そして11月の四谷大木戸の第5回新宿展を成功裏に終了した。次いで総まとめとして、2023年7月には、第6回「玉川上水・分水網上下流連携総括シンポジウム外濠・日本橋地区展」（会場：銀座ブロッサムホール）を成功裏に終了したところである。

目指す世界産産登録への課題を5点に整理すると、

- ①玉川上水系の清流復活（自然環境・緊急水利）
- ②地域に開かれた水辺空間の形成
- ③遺構の保全と水路（跡）によるネットワーク
- ④玉川上水・分水網の利用拠点整備
- ⑤市民による利活用・維持管理・運営へ

(2023-08-05 玉川上水ネット代表 西村 弘記)